P.S. あとがき　天台院「春聴文庫」発見

直木賞作家であり僧侶でもあった今東光（1898～1977、法名「春聴」）が住職を務めた紫雲山天台院（八尾市西山本町）で、このたび「春聴文庫」と墨書された二函の経函が見つかりました。現ご住職星野様のご許可を得て、今東光資料館のスタッフとともに資料調査をさせていただきました。

一函には『成唯識論』や『阿毘達磨倶舎論』などの経本（いずれも版本）24点が収められています。これらは、東光の仏道修行の足跡を知る資料として大変貴重です。もう一函には『天台大師和讃』や『恵心僧都和讃』をはじめとする小型折本の他に、英字日記や箏組歌の歌本である『琴曲抄』など合計47点を確認しました。英字日記は東光が浅草寺で出家した1930年のもので、調査団はひととき興奮に包まれましたが、残念ながら内容からも筆跡からも東光の手になるものではないようです。一方、使い込まれた『琴曲抄』には東光の母方の姓である「伊東氏」のサインが認められ、母思いだった東光の姿が偲ばれます。

東光は、1951年から1975年まで八尾で過ごし、その間に、勝新太郎主演映画にもなった『悪名』など、河内の人情と風物を題材にした「河内もの」と呼称される物語群を数多く発表しました。作品さながらの豪胆な言動で知られる東光ですが、その一方では、僧官の最高位である大僧正にまでのぼりつめた信仰の人でもありました。東光が僧侶としてどのように研鑽を積んだか、「春聴文庫」は東光の新たな一面を切り開く大きなヒントになるでしょう。（大阪経済大学 講師　辻 晶子）

見つかった二函の「春聴文庫」

境内の「東光文学碑」（右）

【資料館付記】英字日記はおそらく東光の父・武平氏によるもののようです。当文庫の公開の予定はされていませんが、天台院の境内では「東光の文学碑」等を見学することができます。（近鉄「河内山本」駅から北西へ約300m、徒歩約4分）

©令和７（2025）年 八尾図書館 今東光資料館

KON TŌKŌ MUSEUM
今東光資料館だより 冬
令和7（2025）年 No.4
編集・発行：今東光資料館 tel.072-943-3810
〒581-0003 大阪府八尾市本町2丁目2番8号
八尾図書館3階

Series 東光が描いた河内・八尾　～八尾の味覚～

今回は、東光が愛した河内の味覚をご紹介。

冬といえば鍋ですね。当時の河内では「シャモ（軍鶏）鍋」が名物。東光は幾度も作品中に登場させています。

農閑期の楽しみとして、多くの農家でシャモを飼い、生来闘争本能が高いシャモを盆（土俵）で格闘させる「闘鶏」が盛んに行われていたそうです。

そのなかで、一度負けてしまうとその後ずっと闘争心を失ってしまうシャモへの、ある種の「情け」として、負けたシャモを飼い主が食べる…というシーンが多くあります。それくらい、東光がいた中野（現在の西山本町）ではシャモは身近な存在だったようです。

・・・シャモの若鳥は最上の美味だ（略）現代の東京人種はシャモの味を知らないだらう。くひしん坊の江戸っ子は口惜しいだらうが、河内はシャモが食へるんだから有難い土地だ。

シャモの肉は普通の鶏より堅い。しこしこ、にちやにちやと噛んでゐるのがうまい。少しばかり噛んで呑み込んでしまふのは惜しい味だ・・・（「あまカラ」昭和33年1月号甘辛社発行 所収「河内の味」）

・・・シャモの美味は谷崎潤一郎先生もおっしゃって居られ、一度、天台院で差上げたいと思いつつ容易に若鳥が手に入らなかったので残念なことをした。というのは他の土地ではシャモの若鳥も手に入るが、河内人はシャモを惜しんで仲々手離さない。それほど彼等はシャモを愛するのだ。

僕もシャモはうまいこと天下一と言いたい・・・（同 昭和39年6月号 所収「河内シャモ」）

河内シャモの美味は東光の師・谷崎潤一郎にも聞こえ、谷崎が東光を訪問した際には師に闘鶏を披露していますが、残念ながら天台院でシャモをふるまうことはかなわなかったようです。これだけ名声を高めたシャモですが、迫る都市化の波には勝てず、飼育する人は次第にいなくなり、八尾では途絶えてしまったようです。その血脈がどう続いているのか調べてみましたが、詳しくは分かりませんでした。「『河内シャモ』の現在」についてご存じのかたがいらっしゃいましたら、資料館に情報提供をお願いします。（岡本）

Series

東光と青春

東光は父の仕事（日本郵船の船長）の関係で函館、小樽、横浜、大阪そして神戸と転校を重ねます。明治45（1912）年、東光（14歳）は関西学院に入学後、学業より文学や絵画の世界にますます傾倒し多感な少年時代を過ごしていました。

自伝的小説『悪童』の舞台は、創立当初の関西学院がある原田村の「※原田の森」とよばれた、現在の神戸文学館（建築は登録有形文化財・灘区王子町3）の辺りです。

・・・その日の帰り途、土岐と私は一つの蝙蝠傘（こうもりがさ）に入りながら、ぬかるんだ道を長々と歩いた。黒い土に青い麦が油彩のような匂いを放っていた。

「ほんまに君は文学か絵で身を立てんの」

「そう思うてんね」

と私は泉鏡花や永井荷風や当時売出しの谷崎潤一郎に就（つい）て語った。北原白秋の可憐な一巻の詩集「思い出」に私は自分の幼年時代の郷愁を感じたこともあったが、より多く散文的な私は以上の好きな作家の方に心を惹かれた。・・・

（『悪童』昭和32（1957）年 現代社 所収より）

※「原田の森」は大正末から神戸の文化活動の中心的な役割を担い、昭和四十五年には全国で2番目の県立近代美術館が開館した地でもあります。現在は県立美術館王子分館（原田の森ギャラリー）として美術活動や交流の場として利用されています。

「原田の森」からJR灘駅をすぎ海側へくだると、中央区脇浜の兵庫県立美術館が見えます。30年前（1995）の阪神・淡路大震災で被災した県立近代美術館を継承するかたちで平成14（2002）年 ここに開館しました。

自分にとっては仕事（サインデザイン）で建設工事に係わった懐かしい場所でもあります。

年の暮れ、久しぶりに訪れた屋外「海のデッキ」には2メートルをこえる『青いりんご』のオブジェが在りました。同館を設計した建築家・安藤忠雄氏のデザインです。作品のモチーフとなった詩人サミュエル・ウルマンの**「青春は人生のある時期ではない心のありようだという」**解説文につづいて、安藤氏は**「いつまでも青いりんごであれ」**と私たちに「青春」を熱く語りかけてきます。（美術館は海外の旅行者にも人気のある施設です。）

東光が青春を過ごした明治・大正の「原田の森」と『青いりんご』は、時をこえてつながっているようにも自分は思えます。求めずして今日の出合いは、偶然の引寄せ？（木村）

現在の神戸文学館（かっての「原田の森」あたり）

屋外オブジェ『青いりんご』2019年

Column

-東光余聞 No.4- 文：伊東 健

『カンブリア宮殿の先駆け？』

作家・村上龍と俳優・小池栄子がナビゲーターとして毎回、経済人をゲストに迎えるテレビ番組が2024年9月で放送900回を超えたそうです。実は、今東光も雑誌「財界」「経済サロン」誌上等で、昭和三十三年から昭和四十年頃まで、かなり頻繁に経営者との対談を行っています。ざっと名前を挙げれば、原吉平、水野茂夫、佐伯勇、杉道助、坂内義雄、井植歳男、和田完二、太田垣士郎、松下幸之助、早川徳次、町永三郎、川勝伝など錚々たるメンバーです。

特に、この対談相手は関西の財界を中心にしており、活字起こしもかなりベタベタな関西風味が味となっていて、万博開催およそ十年前の大阪経済圏の熱気が充満し、今でも誌面から当時の空気感が漂いでています。それと、忘れてはならないのが、人同士の距離感が近いことかもしれません。寄り添って生きている感が半端ないのです。

少し、実例を紹介してみましょう。松下幸之助の回です。

松下「アナタ、僧籍におられて、お寺をお持ちになってますわね。やはり毎日お寺におられるのですか？」

今「このごろは、あんまり人が来るので、書斎を別にしました。河内山本というところ。ウチの隣りが、オタクの重役さんで吉川さんという人。」

松下「ええ、おります。吉川朝治（松下電器産業取締役）」

今「まだお目に掛りませんが・・。」

松下「それじゃァ、一寸、アナタのとこへお参りささないかん。（笑）少しあの男は堅い男でね、頭が。アナタに少しもんでもろうたら、ちょうどええと思うな（笑）」

（「財界」昭和三十五年二月一日 株式会社 財界研究所発行 所収「今東光連載対談みみずく問答33松下幸之助」）

会話の展開がなんとも微笑ましくなりますが、恐らく今では活字にならない部分ではないかと思われます。

松下電器産業には当時、約2万5千人の従業員がいたそうですが、幸之助は全従業員に向けて給与袋に毎回、自身が記したリーフレットを封入して、社員とのコミュニケーションを図っていたそうです。

その昭和三十三年四月二十五日の給与リーフレットに東光が登場していた資料は、パナソニック ミュージアム松下幸之助歴史館（門真市）内の「ライブラリー」で閲覧することができます。